話 は ガラ ッ 八 0 <u>FL</u> 郎 か ら 始 ま ります。

あら親分」

八五 郎

0 ŋ め ۴ まし 穾 素晴 ブ つ 板を、 張 た。 らしい次高音を浴びせられ ります 意気な単衣を七三に端折 橋 が、 がか 夕 りに見たてたい 風に胸毛を て、 吹 か 位 つ て、 八五 0 せた P 郎は 懐^ふところ のです。 男前 悠ら は 0 + 揚う 我な 手 ح し は が 少 て 足を止 ら ば

俺 か € √

振 ŋ 返るとパ ッ ع 咲 e s たよう な美女が 人 嫣ん 然が と て 郎

八五 一郎親分 は、 の鼻を迎えました。

江 戸 に た つ た 人 Þ あ りま せ ん か

お は 誰 だ 4

ずい ž ん ね エ

木綿の にも、 に \boldsymbol{b} う 女は ひろがるような 単衣にも ち わざと白粉を嫌 ょ ヒネて () と打 e s . る 女 つ つ真似を で つ か み切れ P つ た。 た真珠色の素顔にも、 わ しま か な り した。 ません。 11 魅り 力。 が 見てく 自ゃ 夕ゆうばえ 棄ゖ れ 櫛し は二十二三で ح 野暮を売 巻き e st に つ 物に た ょ すが、 街 た 毛

まア、 見たような顔だが、 大層なせりふねえ、 どうも 思 11 遠からん者は音にも聞 出 せねえ。 名 乗 つ て 見な け、 と言

e s

た けれ بخ. 実はそんな大 袈裟なんじ ゃ ありませんよ、 両 玉

の篠をお忘れになって、八五郎親分」

女 は 少 しば か りしなを作 って 見せます

何 だ、 水 茶屋 0 お 篠 か。 白おしろい ッ 気が 無 < なる か ら、 お見それ 申

すじゃないか」

まア 私、 そん な に 厚ぁ 塗ぬ り だ つ た か ら ?

お 篠 はそ ん な 事を言 11 な が ら、 自 分 0 頬 へちょ つ ع 触 つ 7 見 せ

る せ 真面 目な顔をすると、 屹。 とした凄味が 抜身 のように人

た

ŋ

する

の

です。

笑うと

八

重

歯

が

少

見

え

て、

滅

法

可

愛

5

に迫るたちの女でした。

赤前垂 を 取 払 う ٤, す つ か り 女が 変る な。 年 近く 見え な 11 が

身でも固めたのかい」

飛 λ でも な 11 私な ん か を 拾 つ てく れ 手 が あ る \boldsymbol{b} 0 で す か

マそ う Þ あ る め え、 事 と次第 じ や、 俺 P 拾 11 手 10 な り てえ位 0

ものだ」

「まア、親分」

篠 手 が ま た大 き 夕 空 に 弧こ を 描

゙ところで何か用事があるのかい」

大ありよ、親分」

押 か け 女房 0 口な 5 御 免 だ が 他 0 事 な ら 大え 概だ 相 談 に 乗 9 7 p

るよ ことに 金 のことな تع ع 来 た 日 Þ

ど、 生が 僧に ねえ。 主 に な 親 ŋ 手 分 が 金は な 小 て 判 困 ح つ て e st う 11 b る ところな のをうん ع 持 つ て 11 る け れ

「ふざけちゃいけねえ」

ね、 八 Ŧī. 郎 親 分。 掛合噺はまたかけあいばなし 来年 0 春 に で b B つ 伺

本当に真 剣 に 聴 11 て 下さらな 11

大層また改り り Þ が つ た な

私本当に 木 つ たことがあ る 0 よ 八 五. 郎 親 分

あ んま り 困 つ たような顔じゃ な 11 ぜ、 何 が どうした だし

ガ ラ b引き込まれるとも なく、 少 ば かり真 面 目 に な ま

た。

親分 は 私 0 妹を御 存じ ね エ

知 つ てる とも お秋 とか言 つ た ね。 お 前 は つ三つ

お前 ょ りも 綺麗だ つ た

ま ア、 御 挨拶 ね エ

マ の 妹 が どう した だ

両 玉 0 水茶屋を仕 舞書 った時 0 借 り · があ つ た の で 私 と別々 奉

公し た ん で す。 私は 今は止 したけれど浅草 0 料 理 屋 ^ 妹 は

堅気 が 11 11 と言 う ん で、 湯 島 0 Щ 名屋五 左 衛 門 様

っそ 7 は 料簡 が 悪 かっ たな、 山名屋五 左 衛門 は、 界かい 関かし に 知 ら ぬ

者 の な 癖な 0 悪 11 男だ」

P 後 で 聞 きま た。 驚 11 て 妹 を 取 戻 に 行きま が ど

うし ても返 しちゃ く れ ゚゚゙゚゙ません」

料 の前 借 で もあ る 0 か

ーそ な b 0 は あ り Þ しま せん

証 文を入 れ る とか、 受人をたてると か、 何 か 形 0 残 る b 0) が 向

う **へ** 入 って 居 る ん じゃ な e s か

知 つ た 同 士 で 話 を 9 け、 何 つ 向 う ^ は 入 つ て 居 ま せ W

戻 せ な e st ことは ある ま 4

ガ ラ ッ 八 は 向手 軽なことのように考えて 居 る 0 で た。 お

篠

は

一生懸命説きたてるのです。

時両

玉

の水茶屋で、

女一人行 ったところで、 馬鹿にされて戻される のが精々 です。

今ま でにもう、 三度も追 *(y* 帰されました

「フーム」

娘に で ません。 今 は、 つ れて 独 まだ祝言こそしな 帰 り 者 らなき 0 Щ 名 屋 や、 妹 は お e st 0 が、 秋を妾にする気で居る お秋にどん 決った許婚がある な間違 e st が あ のも承知 ん です。 る か b判 の上 あ ŋ

マ *()* つ は 気 0 毒 だ が • 本 人 が 帰 る気 が 無きゃ どうす るこ ع b 出

来ない」

うな、 「本人は Ŧ. 帰 男 りた 0 に 決 に な つ て つ て、 います。 日蔭者で あ 6 な蛸入道が瘧を患っ 生を送 りた 11 筈は たよ

ません」

いて居るじゃあ の 間 P 私 が 行 りません く ٤, か。 逢わ 私 な は 11 なが もう可哀相 5 P で 階 可哀相 0 格 子 0 中 泣

「それで、俺に何をしろと言うんだ」

ガ ラ ツ八 も大 分呑込みがよく な りま た。

ラチ 先 始 「決して無 め へ行 番頭手代と掛合 ラ さ って、 して下さりゃ 理なことをお 見えるように見え , , 4 き 願 11 っと妹のお秋を救 んです。 いするんじゃ な いように、 私が ありません 一人で乗込 そ e s の燥い 出して来ます」 ん で、 0 山 日名屋 十手をチ 主 の店

ガラ 者の 5 ぬ で 危険を感じたからのことでしょう。 ッ 八 5 0) 十手 た お のチラチラまで借 篠 が ` 妹 0 お 秋を虎狼の りようと言うのは、 腭きと か 5 救 出 全く並々な したさに、

お 秋のろうたき美しさをガラ ッ 八は 知り過ぎて居るだけに、 ح

の頼みを蹴飛ばしかねました。

「よし、それじゃ行ってやろう」

「有難うございます、八五郎親分」

そ の代り、 俺は 店 の 中 ^ は入らな 11 よ。 外 に居 て、 十 手をチラ

チラさせるだけだよ」

ガラ ッ八は馬 鹿馬鹿 も念を押

ガ ラ ッ 八 とお 篠り が、 湯 島 0 山 名屋 行 つ た のはそ 0 晚 0 戌ッっっ 過

は、 ぎでした。 そ 0 晚 途中 の冒険に対 で パ して、 イ 引っ 掛 何かこう、 けて、 11 芝居染みた興 *()* 機嫌 に な つ 味をさえ感 た ガ ラ ツ八

じていたのです。

遅

4

商売の酒屋の 店も、 大戸を卸そうというとき、

ちょ いと待ちな、 主人に用事があるんだ。 俺じゃねえ、 あ の 女

だがネーー」

敷 居 際 に立ちはだか った八五 一郎は、 片手弥造を懐 へ落

時 々 十手をチラリチラリと見せるのでした。

ヘエー」

相手が悪 いと思 った か、 手 代 の — 人はあ わ てて奥へ 飛込みまし

たが、やがて戻って来ると、

は 離な 屋れ に 居 ります、 どう ぞ 木戸 か ら 庭 ^ 廻 って 下さい

木戸をあけて丁寧に案内するのです。

お篠、 行って来るが e s *(*) 俺はここで待 つ て

いる

お 篠はそ れ に 感謝 0 眼 で応え て、 手代と二人、 木 戸 0 中 0 闇 に

スーッと消えました。

それから一刻ばかり。

煙だばこ を 0 ん だ り 欠伸び をし たり、 鼻を 掘 つ た り、 ガ ラ ッ 八 が

加減退屈した頃、

「待たせたわねエ、八五郎親分」

庭木戸を 開 けて、 そ つ ح お篠が 出 て来ま した。 夜 0 闇 を匂わせ

るような女ですが 0 時 は 不思議にしんみりして居りました。

「お前一人かえ」

え

二人は肩を並 べるように、 中坂を同朋町 の方へ 降りたのですが

妙に話 0 継ぎ に穂を失っ て、 しばらく は黙りこく つ て居たの でした。

本当に有難うよ、親分」

そ りゃ構 わねえが、 肝心にん の お 秋はどうしたん

だし

駄目よ、 やは **9** ° 証文を出さなく たっ て、 奉公人 に 変 ŋ は な ()

ん だも 出 代 り時 でもな () 0) に、 無理 に れて来る わ け

ない」

「そんな馬鹿なことはないだろう」

「可哀相に、本人もその気になって_

お 篠 の 謎^なぞ のような言葉は ガラ ッ 八 0 神 経 に も何やら大きい 疑ぎ

問符を投げかけました。

「山名屋に踏み止まる気になったのか

え

一人はそ れ つ 切 り、 また黙り つ て しま e st ました。

朧ぽ ろの月。 秋近 11 春め 温 かさが、 良 年増と歩くガ

ラ ッ 八を、 少 か り道行 め か 心 持 します。

八五郎親分、 ここでお別れ しましょう

はフト立止 りました。

お前はどこへ行 んだ」

近頃は三味線堀 に いますよ、 奉公は止して、 母親とい つ ょ

じゃ気を付け て行きねエ、 一人で淋しくはない 0 か

江 戸 中 です

江戸 の真ん中だからな_

ホー

「あばよ、

お篠」

淋しがって は面白 () **|**そう かり に のですか 笑う 0 です。 と言った気でしょう。 男が 淋 が 5 な b 女が



©2017 萩 柚月

あ、 ちょ いと、 八五郎親分」

何だ e st

怒っ ちゃ 嫌よ、 親分、 れ はほ ん 0 私 のお礼心、 取 って下さ

る ゎ ね エ

お篠 は <u>F</u>. 郎 に 寄 り 添うよう に 紙 に包んだも 0 を、 そ つ とそ

の袂に落し込 む 0 です。

何をする λ だし

あわてて 取 出 「すと、 紙 が 破 れ て、 落ち散 る 小 判が三枚 Ħ. 枚。

「あれ 八五郎親 分

冗談じ Þ ね エ

五郎 は 手に残 る 小 判を汚れ 11 bの のように 叩き付 け ると、 **怫**ぷっぜん

として背を見せました。

ま ア、 親分」

ですが、 長 て見たこともな 4 お あい 篠は 安岡 だ水茶屋 ح 0 世 つ 引 か 0 が に奉公して、 つ 奇 袖 た 蹟を見るような心持で、 のです。 0 下を取らな 張も意気地も心得たつも i s なんと いうことは、 立ちつく り ました。 想像 の お篠

左衛 門はそ 0 晩殺され た 0 です。

P 離屋の一・ 立て ず に と間 死 ん で だ 0 誰とも で ょ う。 知れ 縁 ぬ 側 者 に 0 手で、 崩ず 折ぉ れたまま、 胸を <u>と</u> Ž 血 ぐ 汐 り、 0 中 声 に

息 が絶えてお りました。

何時、 どうして殺された か、 母^ぉ 屋ゃ に 11 る奉公人たちは 何 K \boldsymbol{b} 知

す + 雨 ŋ 男 戸 は 0 ん 主 枚 人五 だ 翌 け る 左 開 朝 衛 け に 門 放 な は脂ぎった つ つ たまま て、 手 代 死体を横たえて 力 の清 ン 力 松が と朝 庭 か 陽 5 11 0 声を掛 たと言 入 る 中 う の Ŧ.

騒 ぎ は 瞬ん 0 うち に 山 名 屋 を煮え ŋ 返 5 せ ま た

立 巻 か 調 つ 0 て 形平 脇 べる 差 う 衣た を 次 ع で つ 着 が か 飛 た ŋ 雨 まま ع 月 戸 6 思 か は で 行 何 確 11 に か 人 か つ 左 た 眺 を に 主 乳 め 迎 0 え た は の 下 ところを、 た 山 そ を か 名 れ 突き上 送 屋 か **E**. 5 つ た 左 ___ 沓^く げ 衛 刻 た 脱ぎ 門 0 b 後 に ح が 開 P 0 11 る け で か と通 す 曲 < た 者 ŋ が 現 下 寝ね

突 お あ 11 中 た た を 脇 Ŧi. せ 調 差 百 W る は 両 ع 0 そ 小 判 番 0 辺 が 頭 に 0 見 元 綺 当 麗 吉 らず に 0 言 な < 11 奉 な 分 で 公 つ 人達 は て お に ŋ 離 ま は 屋 別 す 0 に 金 怪 五. 箱 左 に 衛 者 れ を 7

松 むよ 起 で な め 附 は 番 て た は 頭 ŋ せ 0 て () 元 え る お て 11 吉 少 様 だと言 **H**. ŋ て は ま 子 11 両 す ば そ 五. で 胡ご す + って が う か 麻ま P が 前 ŋ 道 お 化如 あ 後、 ح 楽 す り れ り 溜 ま 者 三 方 は ま め す + 死 な に せ る 情熱を 上 骸 ん 事 年 を に b 興 見 死 奉 ح 味 骸 付 感 公 ん じ を し け な 0 た白智 発見 る 持ち た 肌 とき、 で 合 者 過ぎ 0 で で、 ょ う。 間 あ て 着物 わ は し 手 盗 7 つ 百 か る 抱 血 両 0 り ま 清 溜た

K 0 他 う 夜中 れ 下 人 ま 女が に す 掛け 人 蔵ら に 女二 人と 起 きても 下 ح 男が ٤, 11 う恐 人 小 人、 ろ に 僧 知 ع 5 下 小 厳か れ 男 僧 ず が が め に は済 人、 つ 11 名 0 を 部 み 持 ま 屋 れ せ は K 2 疑 た 寝 ん 浪 7 61 0 13 外

が 剣 0 か 術 居候をして つ ょ ŋ り は で 似 お 小こ ぬ 7 唄浄瑠璃り かん様子 お 猫 ります。 の 子 で 0 0 す 四十年輩 節 ょ 廻し が う な二本 小僧 に苦労する の遠縁 差 から下女に で 0 肌 た。 お 国者 合 まで甘 Ŧi. の 男 左 で、 衛 で 名 前 す 門 く 見 は 5 用 の むず れ

散者 手を 茶 れ 世話をする筈でした 色 は 陶 で う す。 酔 眼を 九 に の に導かずに な び じんそう 持ち、 お 篠 逢 0 は措 が 妹 つ 0 よう • て 0 か () まだ目見得中で、 お な な る 秋 ٤, 娘 は 11 と言っ で し 行 あま た。細面で、 く た、 行く り \Box 母ぉ 屋ゃ 五左 をきか 世にも 衛 に 小麦色の 得難 な 泊 門 って 11 0 身 く 11 魅力 せに お 0 皮膚と、 り 廻 の 相 0

ば 先 骸 に 0 疑 発 見 4 の 矢 面 ^{やおもて} 者で に立 血 0 附 つ たことは言うま 11 た 着 物を 着 て で 11 P る あ 手 ŋ 代 ませ 清 松 6 は 61 ち

「主人の死骸を見付けたのは何刻だ」

行 て来 つ る主 て 刻っ 見ると 半ん 過ぎでござ 人が 今 朝 () K ま 限 した、 って起き出さな そ 0 頃 *(*) に 0 な で、 ると 変 だ 11 ح つ 思 P 起 つ て

銭 そ 0 手 代 0 野 郎 0 荷 物 0 中 に 小 判 で三百 両 隠 7

あったぜ」

が 真 動 砂 ち 町; 敷 0 喜三郎 に 包ん だまま、 若く 三百 て 野心的 両 0 で、 小 判を 平 次 持 0 つ 心 て 来 酔 者 て 見 な せ る 御 用 聞 で

す

0 は そ な う 事 b P あ る 0 だ 野 郎 ろうよ 5 11 血 思 だ 5 9 け た な 足 で 離な 屋れ 0 中 を 歩 11 た

次はそう言 つ て 清 松 0 肩 に 手を置きました。

條 「あ、それは、

そ

れ

は

な 親分さん ん た そ の て言 れは何うした。 は 私 つ 蓋 が が じ た や つ て、 あ その金は盗 りません。 て、 お 季はん 白ら 洲す 季き ったに違いありません。 主人の Þ の奉公人が、三百両 通 用 死骸を見付けたとき、 ねえよ。 太てえ の 大金を溜 が 野 主 郎 部屋 人を だ め 殺 た

金 は盗 つ た が 主 人を 殺 した覚は 無 11 と言う 0 か

は

隅

金

箱

0

あ

()

中の

お

金が見えて

いたんです。

ツ

私

そ の 通 り で す、 親 分

と清 松

箱 銭 に は 形 五 0, 百 両 そ 6 な つ て 甘 П 11 た筈だ な 弁解 を信 って言うぜ、 用 しちゃ あとの二百 ならねえ、 両をどこ 第 金

Þ つ た ん だ

喜三 郎 は 少し 焦じ れ 気 味 に 清 松 を小 突き 廻

清 れ 松は変な事 は、 八 五 を言 郎 親 11 分 出 に しました。 訊 11 て 下 さ

昨 夜 Ŧi. 郎 親 分 が お 秋 0 姉 0 お 篠 ح 11 つ ょ に 来 て 離^{はなれ} で

主人 ٤ は 誰 も主人 刻 あ ま ŋ 逢 b 話を 11 ませ ん て 帰 ŋ ま た。 そ つきり、 家

は 本 当 か

0

者

に

清 松 平 の言葉に対 は 四 方を見廻 つする否定 ででい しま 0 た。 色は少 が、 しもありません。 番頭 0 顔にも、 小 僧 0 顔にも、

Þ 八

ヘエ

平次の こんなに腹を立てた顔を、 八 Ŧi. 郎はまだ見たことも ŋ

「手前に言わせると、ません。 ころへ立ち廻らねえの しの片棒などを担がせられたら何うするつもりだ」 が _ 岡 ح 通 つ 引 り 0 0 たし 理窟はあ なみと言うも るようだが、 のだ。 そ ん 万 なと

ヘエ

引^ひ っ 括[₹] すぐ飛んで行って、 妹を救 Þ ねえぞ」 って来やがれ。 い出すとか お篠に泥を吐かせるなり、 何とか言 着物 へ血でも附いていたら、 って、 大金を持出したに違げえねえ。 次第によっては、 弁解させるん

白 「そんなものは 地の浴衣でも着ていなきゃ、 附 いちゃ いませんでしたよ、 少 しくらい 親 血 分 が 飛い沫ぶ e st た つ

夜目 判るも 0) か、 馬 鹿野郎」

ヘエ

八五郎はまことに散 々 の体です。

判 左衛 げえねえ。 ろを見ると、 でなきゃ怨 山名屋には主人を 4 は女癖は 11 男だ。 すぐ のある人間 流 行 悪 お篠でなきゃ しの押込みでな って来い 11 が 殺すような の仕業だ。主人が雨戸を開けてや 金放 れ お が () のは 篠 こと 4 に 11 掛 人 か も判り切 り合 ら、 \boldsymbol{q} 11 思 ね 11 え。 0 っている。 11 間 外はか 流 町 0 仕 つ 内 0 業 押 たとこ あ の 五 込 違

平次の調子は火のように猛烈です。

エ

「万一手前 の名前な ん か 出ると、 十 手捕縄 の返上くら e s Þ 済ま

ねえぞ」

ヘエ

八五郎 は全く追 っ立てられるように 飛ん で出ました。 ん なに

脅かされたことはあ りません。

三味線 堀 へ行 置き忘れたようなささやかな長屋。 って捜すと、 お 篠 0 隠 れ 家 は す ぐ 判 ŋ ま た。 路

お篠 は 11 る か e s

地

の

奥

の奥の、

Ŧī. 郎 が 精 4 つ ぱ 11 太 11 声 を か け ると、

「まア 八 五郎親分」

妙 に物な つ か しそう を声 ع 11 つ しょ に、 嫣然としたお篠 の笑顔

が現 わ れます。

来い、太てえ女だ」

八五郎 は飛付 () て、 お 篠 の手頸をギュ ゥ え 摑っか みました。

あッ 何 を す る のさ、 だ ね

お篠は 力 ッとなって、 勢^き 気^き い 障^さ 立 一った雌猫 の ように 逆 も 毛 を立てまし

た。

ふざけ る な お 篠、 ゆ う べ 持 つ て 来た 金 あ ŋ ゃ 何 処 か 出

した」

何処かり 5 出そうと勝手じ やあ りませ ん か

山名 屋 0 主人を殺 したのが、 お前でな いと i s う 証 拠 は つ 無

「えッ」

ぞし

お篠姉妹

骨

沁

み

Ź

う

な貧苦と

闘

13

抜

きま

た

が

近頃

は

そ

0

戦

闘

力

眼

0

不

自

由

な

宗

兵

衛

は

+

四

に

な

る

伜

0

宗

次

郎

ع

61

つ

ょ

に

•

う

せ

餓が

死し

を待

つ

ば

か

ŋ

0

果は

敢か

な

11

身

0

上

に

落ち

込

ん

で

11

ま

た。

脇差をどこ ^ 捨て た

ピ 公させる ン 何 を言 ピ ン 代 う りに ん て 4 だ *(*) あ 百 両 私 受 はそ 取 つ 6 た な に 事 違 を *(y* 知 な る 11 が b 0) か 私 が 別 金 は れ 妹 る 時 を は 奉

た 0 五 左 衛 門 が

お 篠 の 言 葉は 半 分 述 懐 に な つ て 何 Þ 5 深 々 ع 考え 込 ん で ま

11 ま た

11 言 Þ が 11 訳 つ は て 太 お 自ら て 洲す え 女ま で する だ が 11 11 さ ア、 来 11 ` 俺 ま で だ 使

ガ ラ ッ 八 は な おも お 篠 0 手 を グ イ グ イ ع 引 きます

そ な つ b ŋ じ Þ あ り ませ 6 よ。 私 が _____ 百 両 0 金を 取 つ 7 来 た

わ け み λ な言 つ て し ま 41 ま ょ う、 八 五 郎 親 分

ま お 篠 ま は ガ た ラリ 調 子を変えると、 崩す 折ぉ れ るよう にそこ に 坐 つ 7

づ け 幸 る の 母 で 親 す は 観 音 様 0 お 詣 で 留 守 誰 に 遠 慮 な

り

b

お

篠

は

9

次郎 通 前 然 れ 勘 当 ŋ 山 Ш 名 名 叔 父 を さ 屋 屋 先 名 を 代 Ŧī. 0 れ つ 左 乗 \mathcal{H} 継っ 7 Fi. 衛 左 ぐ 左 ょ つ 11 た 衛 べき筈 衛 門 た に 門 ح は 0 門 とを言 自身 庶しょ は 金 0 沢 で 腹な 子 が し P 町 0 0 う 山 た に 宗 弟 11 <u>_</u> 立 名 が 細 兵 で + 屋 て 々 衛 家を継ぎま と暮 放き 年 て ع 0 後 b 埒ら 11 前 に う 叔 で 坐 眼 父 て 0 0 ح り込 を潰 お 0 が ح Ŧ. た り 左 ま Ŧī. が で W す。 + た で 衛 門 上 た Ŧi. を 越 左 に \mathcal{H} 左 衛 追 父 ح 衛 親 れ 門 て 出 は 伜 0 0 生 宗 兄 さ

あ が そ 頃 奉 れ 0 そう あ 望むまま、 は 強か者の五左衛門は、 で、 のこう 世 を b お の不景気と共にそれさえ不如意 秋 な せめ な 姉妹は、 か が 0 と言 ても宗次郎 5 つ お秋を奉公に出して た 長い 0 い延ばして、 父親 です。 あ 11 が身 だ宗兵衛親 の代から受けた恩に酬 美しいお の 立 容易 つようにしてやる ` のことでは、 子に貢ぎました。 秋を手元に 少しばかり纏 になり、 とうとう五 いるため、 留めおきながら、 纏 った金を貰 つも った金などく か りでした 左衛門 水茶屋 近

侠 気 気 見 う 左 命 りしている人間は、 せ 衛 が 門で け うべは て 縋が 下されば、 で掛 0 が って、 はあ け いよ 人 合うつもりで、 りません。途中で親分に逢ったのを幸 で行 e s 一緒に行 奥 よ妹を返すか、三百か五 ギ へ入らなくても、 ったところで、 3 ッとするに違 ってもらいました。 山名屋へ 真面 行きました。 Щ (J 名屋 な 目 百 に () と思 のよ 親分が 相 の纏 手に う 11 つ 門 た 付 な で Ŕ , , 悪 \Box て 金を出 11 で十手 た 11 親 私 0 れ です」 分 ば す か を Ŧi. ょ

にな つ て怒るわ 郎 は 唸な り ま けにも行きませ た。 か な り太 ん 11 話 です が、 そう 聞 け ム キ

私 た 身を立てる は つ 山 涙が 名 屋 は 出 百 離なれ た て仕様 両 め ば ع か 0 縁側 思 が ŋ な 9 0 て、 かったけれど、 金 でたしかに私 で、 眼をつぶ 妹を人身御 って帰 に二百 それもこれも宗次郎さんの 供分 って来ました」 に 両 上 0 げる 金を渡 か 思う ました。

てお礼を上げたけ でも、一 百両でも取れたの れど は、 みん な親 分 の お蔭です。そう 思

つ

それから 何うした」

ガ ラ ツ八 は 押 つ 冠せて訊きました。

「金沢町 へ持って行って、宗次郎さんに渡しました」

宗次郎は黙って受取ったのか」

その代り妹 のことは諦めてくれ つ て、 く れぐ れも言 って

やりましたが」

すると二人は?」

二人は 緒に なる筈だ つ たんです」

お篠は淋 しそうでした。

五

八五郎 は しょんぼり帰って来ました。

な わ けだ、親分。 お篠は脇差なんか持 つ ちゃ いな か ったし、

どんなに太 い女だって、 岡っ引を番人にして人を殺すわけは ねエ。

五左衛門 から金を貰ったというだけじゃ、 縛れないじゃありませ

か

そう言うのが、 せめ てもの弁に 解です。

「なるほど、 それじゃ お篠は縛 れまい。 \boldsymbol{b} う いちど山名屋 ^ 行 つ

て見ようか」

平次は恐れ入るガラ ッ八をつれ て、 もう () ちど湯島 ^ 行 つ て見

ました。

銭 形の、 大変なも 0 が 手 に 入 つ た ぜ

真砂町 0 喜三郎は、 泥だらけ 0 脇差を振 り廻し すっ か ŋ 悦さ

お篠姉妹 に 入

つ

ております。

何 処にそ んなも のがあ つ たんだ」

平

町 ば か り先 の下 水 に 突 つ 込 6 で、 血だ 5 け な 柄 が だ け 水 0 に

出て る 0 を、 子供 が 見付け 7 大騒ぎし て e s たん だ

柄だ け 出 て 11 た ん だ ね ?

柄が 隠 れる Ø ど打ち込んで 4 ちゃ 見付 か ら な か つ た か P 知 れ

な *()*

どれ ど れ

は、 な つ て 取 お つ りますが、 て見る ٤ 鍔から上は大して汚れず、 なるほど手頃な脇差で、 ております。 溝^{どぶどろ} 紺糸を巻 で 滅 茶 11 滅 た 茶に 柄 に

この 脇差 の持主が な (J から不思議さ、 そ れ に 鞘ゃ bな *(y*

ッ

ŀ

リ 血

がこ

びり

附

61

喜三郎 はまだそ 0 辺を掻き廻 しながら、 こう言う 0 です。

せん。 な 0 魂 b 平 ع の 次 は、 で、 浪人者 は、 町人 少 応家 の鞍掛蔵人に言わせると、 0 縁 た 0 者に しな 遠 11 みに持 当りま 物の で したが、 す。 つ たもの だろう この 何 0 脇差は犬威 得るところも と言うこと、 しの あ よう 武士 り ま

金沢 町 ^ 行 つ て見よう、ここは喜三郎兄 哥に 頼ん で。 来い

ヘエ

ーそ 脇差 を 借 ŋ 7 行 ぜ、 真 砂 町 0

あ、 11 W とも

٤, 山名屋 平次は 沢 町 油 0 隠居 紙を 飛 び の宗兵衛 ま 枚貰 した。 つ の家は、 て、 何 泥と 何 Þ Ш 平次もよく心得ております。 5 に 塗^ま 解らず れたのをク に つ e st て行 ル ク ル と捲る

お篠姉妹

御免よ

犬小屋よ りもひどい裏長屋。

銭形 0 親 分さん

盲目の主人・ 宗兵衛と 膝 つき合せて、 件の宗次郎とお せがれ 篠は 何

ゃ ら話 してお りました。

の 脇 差 はお前 のだろう ね

平次は 油 紙 0 包をクル ク ルとほ ぐすと、 少し 乱暴 泥と 血 に

塗 れ た 脇 差を宗 次郎 の 膝 0 前に 抛き り 出 します。

0 ですよ、 親 分

宗次郎 は悪びれた色も ありません

鞘はどうしたんだ」

平次。 後ろか ら は 八 <u>F</u>i. 郎 0 眼 が ≥虎視眈々、 ح て お ま

す。

面喰 5 つ て脇差だ け 置 11 て 来たん で し よう、 鞘 はここ に あ り ま

すよ

宗次郎 は 静 か に 起た つ て、 形 ば か り 0 戸 棚 か 5 蠟き ぬり 0 禿^は た鞘

を持っ て来て、 平次の前に押 しや りました。

四 ح () う に しては、 若く弱々 見えますが 知識 的 な立

派 な若者で、 貧しさを超越した、 品 のよさがあります。

の 脇差で、 山名屋の五左衛門 が殺されたんだ。 言 *(y* 訳 を 聞

う か

平次は 上が ŋ 框ま に 腰を 掛けて 正 面 からピタリと三人を見や ŋ

ました。

んな言 つ て ま 11 ま ょ う、 聴 11 て 下さ

宗次郎は改ま つ た調子で始めました。

お篠姉妹

さん て、 秋 内 ろと言 知 0 ゆ ź つ が 私 た木戸を 帰 は う 亥刻半過ぎにょっぱん 代 出 6 る 世する とすぐ、 で 金 す に 開け ح 気 れ て、 そ は だ その志は有難 け あ お篠さんが、 0 三百 受取 りません 11 きな 両 つ を持 り 離 屋 て来た 0 二百 つ () が 応 て か 0 湯 金 ら、 両 戸 一を受取 を お 島 の 秋を ح 金 吅 0 を持 きま れ 山 人身御供 名 で 9 た 私 屋 つ た 後 て ^ 行 で 身を立て に き 上げ お 篠 お

を見張 宗 郎 つ て 0 聞 話 入る 0 意 ば 外 さ か 0 り で お す 篠 B 全 < 思 () が け な か つ た 5 眼

返す 持 強 か は \mathcal{H} 談 Ŧi. つ つ ع 左 左 行 ま 衛 衛 P 門 った 腸 門 う た。 に二 ことまで誓言しまし か P 鼻 とう 差し 百 で 私 あ ま は 両 ح で 浈 0 抜 う 5 金 11 を 承 た つ 4 て、 り、 返して 知 て を 11 た 怨ら ん ま 畳 て、 に たが、 突き立てて だ お り、 秋 を H 私 脅と す 0 う か ぐ 0 ち 剣 責せ に 幕 た に め bき り、 が ま 返 した。 あ つ W とう て ま ŋ 最 れ

「それっきりか」

とに た、 帰 つ う言 た 気 抜 身 の が つ う宗 き 付 で 0 、脇差を鞘 す。 ŋ 11 で 次郎 た す 帰 位 つ 0 で に 親 顔 す て 来 納 分 に b て め は 0 か る 私 • ら、 0 は 純 Ŧī. も忘れ あ 情 左 腰 ま 家 衛 に脇 ŋ 5 門 0 を 差 そ 嬉 殺 13 0 0 す まま此 鞘だけ さ 道 生 に 懸 理 が 命さが 残 処ま 畳 あ つ ^ ŋ で て 突 あ ま いるこ 飛 9 2 立 んで 7 7

「それは何刻だった」

駈

引

P

あ

Ź

う

ع

は

思

わ

れ

ま

せ

7 帰 11 る つ た まもな は 子き 刻っ へ 体が が 過ぎでした。 帰 つ て来て、 心 配 しな あ清々 がら子 刻 た 0 鐘 金 を は 聴 Ŧī. 左 11

凄

初

ع

子 衛 門 で に返しましたよー たし と言って、 そのまま床へもぐり込んだ様

父親の宗兵衛が口を容れるのです。

死んだ者は証 りませ く す 親 ね 分 ん た か とすると、 金箱から無くな 人にならねえ。 昨夜のうちに二百両なく つ たのは五百両、 もう少しここを捜して見ようじゃあ 三百両は今朝清松が な つ たのは確 かだ。

八五 郎 は そ つ と後 ろ から平 次 0 袖を引きます。

「黙って居ろ」

平次はその袖を払 つ て 何 やら考え込ん で お ります。

六

「親分」

「何だ、お篠」

平次は、 お篠の 思 () 詰 め た 顔を見詰 めま

「私を縛って下さい」

何?」

五左衛門を殺したのは、この私です」

「何だと、お篠」

した。 さ 衛 は ま 宗次郎さん ん 門はあ が ア 怖った 11 んな器用なことを云ったって、それは思 何という情け 宗次郎さんがそんなに妹の事を思 から、 の後をつ 当座のがれに言ったまでの事で、 な けて いことをして 行 って、 様子を残らず聴 しまっ たん ってく い 詰っ で 本当の心持は、 れ () る ょ て めた宗次郎 う。 のに、 しまい <u>Ŧ</u>i. 左 私 ま

お 秋を返す気は な e st に 決 つ て

下 に 私 さ 五左衛門を殺 は i s 宗 銭 次郎 形 0 さん 親 しまし 分 が た。 帰 つ そ た 後 れ に で 違 あ 11 は 0 あ 脇 差を りません。 取 って、 私 を 思 つ て *()*

な り 寄 頬 お を る 篠はそう言 濡 0 5 で す。 7 白 襟 って、 粉気 に 落 自 ちる 0 な 分 11 0 0 顔 両 で は青ざめ 手を後ろ た。 験^{まぶ}た 廻 に 溢^ぁ。 平 れ る涙が 次 0 方 ^ 豊 膝ぃ か 行ざ

幾太刀斬いくたち つ

ع 平次

滅 茶 滅茶 に 斬 ŋ ま た

そ れ から、 二百両 0 金 は どう

腹 が 立 つか 5 溝ぶ に 抛き り 込みました」

ょ

0 宗次郎さん、 何を言 一本も上げて下さ うんだ、 私 お篠さん、 は縛 e s られて行きます。 りましたが、 そして、 お前は人を殺せるような人じゃ お秋と仲よく暮して下さ 処ぱ 刑ぉ に上が ったら、 線香

され て どうすることも出来ません。

宗次郎

は

驚

W

て立ちか

か

お篠

0

一生懸命さに圧

倒

笑って な 11 は 沓^{くっ} て来た 事を言 う 脱ぬぎ で るぜ。 か うのだろう。 な 11 でも、 よ、 5 と突きにされて死んでいるんだ、 お篠。 八の野郎 とは 鞘を隠さなか が、 お前は宗次郎を下手人 は飛んだお篠さん贔屓さ。 八 宗次郎が下手人でな 五 郎の つ たことでも解っ 顔を見ろ、 ع あ e s 思 0 て 女の手で 15 通 第 一、 ع 込 () り る。 は W 二 脇差 で、 五左 滅め お 前 をお そん 衛 が 滅め ヤ

茶に斬られて死んだわけじゃない

お篠はヘタヘタと崩折れました。

もう 11 ちどや ŋ 直 しだ。 こん な他愛い もな e s 殺 し で、 こん な

に骨を折 る の は珍ら · 1 下手 人 に な り手 が 多過ぎた ょ

平次はそんな事を言 いながら、 金 沢 町を引揚げてしまっ た の で

す。

それから湯島へ引返す道々、

八、二百 両 の金をどこ ^ 隠したと思う?_

平次は変なことを訊きます。

「自分の行李か何かじゃありませんか

Þ 山名屋 の 奉公人の荷物 は みんな 見 たが、 そ ん な b 0

持っていたのは、清松だけだ」

「ヘエ」

を 脇差 下手人は さ で 一と思 昨夜べ 込 み、 の 子 ミ e s に わざと見つか Þ 刻過ぎ、宗次郎 った後、 二百両 るように が の金 帰 柄か つ た後 だけ をどこか 出 ^ 行 に て つ て、 隠 置 11 宗次 た、 脇 郎 差

た ع 聞 11 た 時 か 5 俺 は下手人は 脇差 0 持 主ではあるま 11 思

たよ」

あ

0

脇差

0

血だらけ

な柄が見えるように溝

0

中

に

突

つ立

つ

て

(y

つ

「~エー

山名屋 か 5 町 P 持 出 たところを見ると、 下手 は 中

山名屋の家の者だ

「清松じゃありませんか」

11 や、 清松は下手人じゃ な · 1 下手人なら三百両 0 金を盗 つ て、

自分の行李などへ隠す筈はない」

「すると?」

手に 違 や下水じゃ誰が見付けるかも分らな 下手人は二百 *()* な 入るところだ , どうしても知れないところで 両 の金を飛 後できっ んでもな と自分の *(* \ いところへ隠 P のに なるところ、 後できっ て と 自 お i s たに 分

|

す折を^{ねら} よく道が付 と跡が 下手人 付く」 ってい は 恐ろ 11 て たか 11 る < 食えな か b 見^ゅ知 物[®]れ だ。 な 11 4 奴 庭は苔 だ。 あの離屋^{はなれ} 毎 晚主人 が ぱ から の様 11 誰 だが 子を の寝部屋 覗かが **E**. 六 つ 遍 ^ て P 番 殺

ちょ 人間 だろうが、そ か る 主人の五左衛門が に違 っと見たところ、 0 は、 な 五 左衛門 の宗次郎に疑 死ん に 五左衛 は 子 で が いをか 門が な 番 損をする奴は誰だ 11 から、 死 ん けるように仕向 で いちばん損をするような Щ . 名 屋 0 跡を け 継っ 11 た ぐ宗 ちば の は 次 ん 儲り 郎

ŋ で 次第に疑 した。 分 強 間 大 を畳 想像力に、 み上げて、 ガラ 下 手 ッ 八 は の 呆気 影法 師 にとられ に 生命 を 付^ふ 聴入 与よ るばか て行

七

親分、 庭 の 苔 は、 母^ぉを の居候先生 の 部屋 の窓 の下まです つ か ŋ

踏^ふ まれ ていますよ」

八 郎 は 鬼 の 首でも取 つ た様 子です。

ょ ょ そ れから、 主 人が死んで e s ちば ん 損する 奴は 誰 だか

聞 11 て 来 € √

エ

八五 郎がもう いちど母屋 へ行 くうち、 平次は離屋 0 戸 棚 5 11

ろ ろ の 書類を 取 出し てザ ッ لح 眼を通しました。

は千三百 四 十 両、 貸 金が三千五 百 両 外 に 地 所

大変な身上だな」

平次は番頭 の元吉を相手に遺 され た身上を調 べて お り ま

蔵 へ案内させて、 有 金を 調 べ て見る ٤, 帳 面通 り 千三百 깯 +

八両 ピタリと合って、 一文の 狂 () もありません

「番頭さん、 さすが に恐れ入 ったね。 主人が一 死 ん だ後で、 文

銭 の不審な金も な () と言う のは大したことだ」

ヘエ、 恐れ入ります」

ところで、 そ の紙に包ん である分は何 だ e s

れ は 奉 公人達 ^ わ け てやるように、 主人が 達者なう ち

こう して置きました」

بح れ ど れ

取 ŋ 0 な 11 御 主 0 ことで、 無 理 もな e s 用 意でござ e s

取 つ て見 ると、 紙に包んで小僧二人の分 十両ずつ、

と下 男 ^ 五 一両ず つ、 手代 へ五十両、 居候の鞍掛蔵人の増二人の分は十声 へ二百両。

さ ん 0 は な 11 ょ う だ ね

ヘエ、 残 り を 私が 頂戴することに な つ て お ります」

お篠姉妹 大層なことだ

ね

「それから貸金の方は、 山名屋の後を継ぐ方に引渡します」

なるほど、 -ところで、 の 包の上に書 いた字は、 主人の筆跡

「左様でございます」

「それにしちゃ墨色が 新し いようだが

平次が指先に力を入れて、 包んだ紙を揉み砕くと、

あ **ッ** ∟

中から出て来たのは、 斑^{はんはん} と鮮血 に染んだ、 小判が二百枚。

親分」

あ てるな八、 下手人 は あ 0 浪 人者じゃ ねえ。 ح ん な手 数 の か

かった細工をした黒鼠だ」

平次が差 た指は、 真っ 直ぐに元吉の 血 の気を失った額を指

たの で す。

御用 ゚**ッ**

飛付く八五郎、 全く一とたまりもありません。

X

X

あ の番頭が悪者とは 驚 (J たね」

ガラ ツ八 は絵解きが聞きたそうな顔です。 下手人の元吉を送っ

た帰り

はどうにでもな 跡取 りの無 4 山名屋だもの、主人が死ねば、番頭の一存で身上 るものさ。 さい しょ俺は浪人者をあや いと睨ん

お篠や宗次郎は?」

だが、

だん

だ

ん

調

べて行くうちに違って来た

あの二 人は善人だよ、 はなから、 疑っ て見る気も しな か つ た。

尤も、 ね それ 突っ な 思 宗次郎 つ 4 返 込 たんだろう、 お篠は宗次郎に気があった。 み、 して来たと聞 脇 きざし 出 妹と宗 世させようとしたの 行は宗 次郎 次郎 いて、 考えはあさはかだが、 のだ ^ の申訳 と聞 自分の悪 に、 は 11 て、 悪か 妹を人身御供に上げてまでも、 自分で罪を背負 かった事に気が付 った てっきり下手人を宗次郎 が、 あんな女は 宗次郎 って行 がすぐ金を e s 憎 たのさ。 な 気に 4

八 の 平 顔を は 覗ゃ く ん な の で 事を言 す。 つ て 度 は お 篠 0 道 具 に 使 わ れ た ガ ラ ッ

「番頭を下手人と解ったのは?」

のある のは、 宗 次郎 男 元吉か蔵人か清松 でな が 帰 つ たあとで主 蔵 人 は二本差 の外にな 人 に 会 の ° (4 < ` せに 清 疑わ 松 れ はそれほど 猫 もせず易々 0 子 0 ような男だ、 0 深 と殺せる いたくら

「それに?」

そ

れ

千三 P ることをう 矢張り 帳 百 尻を合せて大金を胡 あ 四 十八 わ て つ か 両 て 居た り忘 と 書 ん れ 11 だ て て あ 麻ま ね () たところなどは、 る 化如 す 0 に の は、 清 松 番 頭 0 盗 0 落着 んだ三 外 に な 11 百 て 11 居 0 両 を が、 るようで 勘 定す 有 金

なるほどね」

どこ 疑 11 わ ち 宗次郎 隠 ることも W 0 11 持 た 61 か ع つ な て 気 11 来 ろ が た二百 付 () ろ考え た。 両 たが、 0 こ 金を、 れなら人に見付けられることも、 どこか 金 の隠す場所は ^ 隠 した に 相違 金箱 な が e s

篠姉 「 な

ア

る

だ 山 だ、 だが、 た つ 判を、 0 は、 遺言を どん 々 包 洗 考え抜 ん な つ に で て 置 細工が上手でも、 て 11 11 金をわ たこ る く 睱 0 لح は は どう ける な は か 違 か な つ 5 た筈だ。 e s な 血 て の中 () 11 枚書 る が、 封 からかき集めた二百枚 それ を 11 た がま P て 0 __ た が 々 臭 名 前 あ e s ば を書

平次の説 明 に は、 も う 一 点 0 疑問 b ありません

浪人者 0 窓 0 下 に道を つ けた 0 は

つ まら な 11 細 工 だよ、 小器は 用, な 悪人 はそ んな事で 人 が 騙だま せ

思って いる だ け 0 ことさ」

それ は どう でみ ん な る な 解 で りましたよ、 よう? 親 分。 ところで、 宗 次郎 Þ お 篠

宗次郎 は 山 名 屋 0 跡取になるだろうよ、 お 秋 は そ 0 女房さ」

お篠が 可 哀相 じ ゃ ありません か、 親分」

悪 11 女さ 八の女房などにどうだ

御免蒙ろう、 強請り の片棒を担 がせられちゃ 敵なかな わ な *(y*

そう言うな、 八。 俺はあのお篠と いう女に見どころが あると思

ておりました。 二人は そんな 事 を言 11 ながら、 う 次の家 近く 差掛 つ

(編注)

ます。 作品中には、 底本のままとしました。 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵一萩 柚月

初 出 「錢形平次捕物百話」 第九巻 中央公論社 昭和十四年八

月五日発行

底本 「錢形平次捕物全集」 第五巻 河出書房 昭和三十一年七

月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

28



銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/